The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 言語社会化とアイデンティティ -オーストラリア在住日系人のコミュニカティブプラクティス- |
| Author(s) | 武井, 紀子 |
| Citation | 大阪大学, 2020, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/76258 |
| rights | |
| Note | やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

# 論　文　内　容　の　要　旨

| 氏　名　（　武井紀子　） | |
|---|---|
| 論文題名 | 言語社会化とアイデンティティ<br>−オーストラリア在住日系人のコミュニカティブプラクティス− |

論文内容の要旨

本研究は、オーストラリアに在住の日・英バイリンガル話者3人を対象に、彼らの養育者またはピアとの相互行為におけるコミュニカティブプラクティスに着目し、それぞれのアイデンティティ構築を言語社会化の観点から探究する。

言語社会化研究は、モノリンガルな状況から多言語状況、制度的場面、職場などを対象に、子どもから大人まで、多岐に亘る場面と幅広い年齢層を研究の射程にいれる。本研究は、移住を背景とする多言語状況にいる日系人の言語社会化研究である。言語社会化研究では、言語に存在するまたは言語を通した権力の作用に注目する。ポストコロニアル、トランスナショナル・グローバルな状況における従来の言語社会化研究では、多数派の言語への言語シフト、および多数派の言語へのそれと少数派の言語を維持する言語維持に関する研究が報告されている。これらの状況を対象とした研究では、社会構造と、それと関連する言語イデオロギーが人々の言語意識に影響を及ぼし、それが言語実践に反映され、徐々に言語シフトが進行していく状況が報告されている。多言語状況における言語シフトが指摘される一方で、自分たちの民族言語を維持・継承しようという動き、いわゆる「可逆的言語シフト」(Reversing Language Shift)(Fishman 1991)も主張されている。オーストラリアにおけるコミュニティ言語を社会言語学的見地からみる研究者らは、少数派の言語維持に着目している。しかし、これまで、日本人および日系人を対象とした言語シフトおよび言語維持研究は管見では非常に少ない。そしてそれらの言語実践に着目した研究はほぼ見当たらない。本研究では、2011年から2015年のシドニーでフィールド調査を行い、現地に在住する3人の二世代目にあたる日英バイリンガル話者を主研究協力者とし、そして、彼らのネットワークからピアと母親らから協力を得て、聞き取り調査と会話データを収集した。本研究は、バイリンガル話者および養育者の、主に移住背景をはじめとする日常の言語使用に関する聞き取りをまとめ、実際の会話データから、それぞれの研究協力者が母親やピア間との間で行っているコミュニカティブプラクティスに着目する。

言語社会化は、端的にいえば当該社会におけるノヴィスの言語習得をみる。言語社会化における言語習得には「言語を使うための社会化」と「言語を使うことを通した社会化」(Shiffelin and Ochs 1986)の二つの側面があり、ノヴィスが当該社会の成員との相互行為を通して、成員性を獲得することを目的とする。したがって、言語習得とはいえども、言語知識の習得および構築だけではなく、社会的文化的要素（イデオロギー、当該社会の文化および慣習、アイデンティティなど）の習得をも包括する。本研究では、移住を背景とするバイリンガル話者が、養育者（母親および両親）やピアとの相互行為を通して、適切な日本語の使用と日本社会における社会通念、慣習、規則などをどう社会化するのかをみる。また移住のコンテクストでは子どもが親や大人に当該社会の言語や慣習などを教えることがしばしばある。そこで双方向の社会化をみることも本研究では視野にいれる。

本研究は、第1章序論、第2章理論的枠組み、第3章先行研究、第4章研究方法、第5章研究協力者、第6章エヴァ：行為指示、 第7章ゆき：メタ語用論実践、第8章まき：修復、第9章終章の全9章から成る。

序論では、本研究の動機と問題意識について触れ、なぜ言語社会化のアプローチを使用するのかについて説明し、本研究のリサーチクエスチョンを提示する。社会言語学者のClyne(2003)は、日本人コミュニティの言語シフトの進行が急速に進んでいることを指摘するが、それは、統計調査による知見であり、統計調査ではその実態がみえない。移民研究では、ホスト国の制度が移民グループの行動に影響を与えるという点が指摘してされており、人々の相互行為に視点を移すという、研究の視点とその枠組みの転換が求められる。さらに、この指摘の重要な点は、マクロ（社会構造）とミクロ（相互行為・言語実践）との関連である。マクロとミクロとの関連をみる研究の一つに言語社会化研究がある。マルチリンガル話者の言語実践をみる研究の枠組みには他にもトランスランゲージがあるが、ここで簡単になぜ言語社会化の枠組みを用いるのかを説明する。

第2章では、言語社会化の理論的枠組みについて概観する。言語社会化は、言語人類学、社会学、社会言語学、教育学、心理学などの複数の視点を取り入れた研究分野である。第2章では鍵概念をエキスパート・ノヴィス、実践、エイジェンシー、指標性、言語イデオロギー、オーストラリアの言語政策の順に説明する。

第3章では言語社会化研究の先行研究について、移住のコンテクストに関連するものを取り上げる。言語社会化の初期の研究、言語シフト、および多言語状況における言語社会化研究に焦点をあて、パプアニューギニアとサモアでの研究および米国、ドミニカ、ギニア、イギリスで行われた研究、そして継承語研究を概観する。

第4章では、コミュニカティブプラクティスの分析に入る前の段階として研究方法を説明する。第4章は二部構成で、第一部で、日本人移住者の移住背景、現地の日本人コミュニティ、日本語補習校（土曜校）について概述し、第二部で、研究方法について説明する。ここでは、日本語補習校がオーストラリアの言語政策の一環であり、現地の保護者らの日本語維持および継承の場として機能していると考えられることについて言及する。移住者に関する用語について、二つの用語を紹介する。一つは、オーストラリアでは移住者の子どもを「一世、二世」などとは呼ばず、「パーマネント」（親が子どもに対して）、「オーストラリアンボーン」、「ジャパニーズボーン」（第二世代目が自分たちを表現する際）と呼び、子孫を「一世、二世」という呼び方ではなく第二世代目の人々は自分たちを出生地で分けて呼ぶことに言及した。二つめは、近年の海外移住者はかつての貧困からの脱出を目的とし海外へ生活の糧を求めて移住する移民ではなく、生活そのものを楽しむことを目的として移住する傾向があることから「精神移民」（佐藤1993:13）という名称があることに触れる。

第5章では、本調査で協力を得たバイリンガル話者6名と4名の母親に対する言語使用などに関する項目の記述箇所と、本研究におけるバイリンガル話者4名と母親2名の聞き取り調査をまとめたものについて報告する。

第6章から第8章までは分析のパートである。第6章では、エヴァの行為指示に焦点をあてる。分析の着目点は、日本人の母親と日本在住の祖母が行為指示を通していかにエヴァにモラリティを社会化するのか、そしてエヴァがどのような言語資源を使って抵抗や意思を示すのか（エイジェンシー）をみる。そして、移住のコンテクストでは、子どもが当該社会の言語や慣習を親に教えることがしばしば観察される。ここでは、双方方向の社会化についても観察する。まず、社会的役割の認識と責務に関する社会化を母親による行為指示とエヴァの応答の2部にわけてみる。続いて、日本の社会規範およびマナー関する社会化を、母とエヴァによる行為指示からをみる。祖母の行為指示では、「努力」、「理想の日本女性像」、「家族の社会的役割」の社会化をみる。最後に、母の社会化では、日本社会の規範および物を大切にするという社会的価値観の社会化をみる。

第7章では、ピア間の社会化に焦点を当てる。第7章では、ゆきとななが行うロールプレイ（メタ語用論的実践）およびゆきと日本人留学生ようことの会話に焦点をあて、彼らがメタ言語およびメタ語用論的意識をいかに働かせ、メタ言語的活動やメタ語用論的活動を展開するのか。ここでは、日本語（店員用語・若者ことば）、日本社会のイデオロギーの習得に関する言語社会化の過程を探求する。ロールプレイ（ごっこ遊び）は、幼児の認知発達の段階でみられる活動として心理学や教育学の分野で研究が行われてきたが、移住を背景とする本研究のバイリンガル話者にとって、ロールプレイは、メタ言語意識とメタ語用論的意識を喚起し、語用論的知識の習得とピアの社会化が行われる特別な場であると考えられる。第7章では、メタ語用論的活動として、メタ語用論的コメント、引用、略語の説明、造語の手続きなどの過程をみる。

第8章では、まきとまきの両親の相互行為において言語社会化のコミュニカティブプラクティスの一つである修復に焦点をあてる。第8章では、データでみられた4つの修復形式（自己開始自己修復、自己開始他者修復、他者開始自己修復、他者開始他者修復）を取り上げ、修復、言語習得、アイデンティティ、言語イデオロギーの関係を探究する。第8章で着目したのは、家庭の言語方針である言語イデオロギー、修復活動が成員性とどう関連するのか、まきの世界観の表示である。日本文に英語を混ぜない、その逆も然りというまきの家庭の言語方針がまきとまきの両親との相互行為にどのように表れているのかをみる。修復活動と成員性との関連については、修復組織によって日本語話者の成員性もしくは英語話者の成員性が表れると思われる。興味深いのは、まきが家庭の中でいかに自身の世界を表すのかについてである。日本語には英語になっているものもあり、8章では「体術」対 “taijyutsu”の語をめぐって、日本語の概念でその語を理解している両親と、英語の概念でそれを理解しているまきと両親との間の齟齬およびまきがいかに英語の知識に基づいてそれを説明するのか、「術」に関する修復活動を通してまきが英語と日本語の二つの世界を示す点に注目する。第9章では、第1章から第9章までをまとめ、今後の課題および言語社会化研究の課題を提示する。本研究を通して得た知見から、日系人二世代目のバイリンガル話者の社会化とは、日本社会への成員性の獲得を目標とするものではないかという提示をする。

様式 7

# 論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏　名　（　武井紀子　） | | |
|---|---|---|
| 論文審査担当者 | （職） | 氏　名 |
| 主 査 | 教授 | ジェリー・ヨコタ |
| 副 査 | 教授 | マシュー・バーデルスキー |
| 副 査 | 教授 | 義永美央子 |
| 副 査 | 准教授 | 榎本剛士 |

## 論文審査の結果の要旨

武井紀子氏の博士学位申請論文、「言語社会化とアイデンティティ―オーストラリア在住日系人のコミュニカティブプラクティス―」は、オーストラリア在住の日英バイリンガル話者3人のコミュニカティブプラクティスに着目し、それぞれのアイデンティティ構築を言語社会化の観点から探求するものである。先行研究において、少数派言語から多数派言語への言語シフトが多く指摘される一方で、少数派の民族言語を維持・継承しようという動き、いわゆる「可逆的言語シフト」も観察されているが、日本人・日系人についての研究は非常に少ない。本研究では、2011年から2015年のシドニーでフィールド調査を行い、現地に在住する3人の二世代目にあたる日英バイリンガル話者を研究協力者として、聞き取り調査と会話データを収集して、そのコミュニカティブプラクティスに現れる言語を通した権力とエイジェンシーの相互作用に注目している。

序論では、動機と問題意識について説明し、なぜ言語社会化のアプローチを使用するかについて述べ、リサーチクエスチョンを提示している。統計調査では計り知れない、移民コミュニティーの実態を把握するために、マクロ的な社会構造とミクロ的な相互行為および言語実践を観察する重要性を提唱している。

第2章では、言語社会化の理論的枠組みについて概観している。エキスパート・ノヴィス、実践、エイジェンシー、指標性、言語イデオロギー、アイデンティティ、成員カテゴリーという鍵概念に加え、オーストラリアの言語政策も説明している。

第3章は、先行研究の概要である。言語社会化研究を中心に据えながら、幅広く、ポストコロニアル理論、トランスナショナル理論、移住のコンテクストに関連する研究や言語シフト、継承語研究を概要している。

第4章では、コミュニカティブプラクティスの研究方法を説明している。第4章は2部構成で、第1部で、日本人移住者の移住背景、現地の日本人コミュニティー、日本語補習校（土曜校）について概述し、第2部で、分析法について説明している。ここでは、日本語補習校がオーストラリアの言語政策の一環であり、現地の保護者らの日本語維持および継承の場として機能していると考えられることについて言及している。また、移住者に関する用語について、世代を示すことば及び移民の動機の変遷についての考察を述べている。

第5章では、研究協力者の言語使用に関する記述および聞き取り調査について説明している。それぞれの背景、家庭内と家庭外の言語使用、日本語の習得と継承、アイデンティティ、そして言語態度について総括している。

第6章から第8章までは、分析を提示している。

第6章では、行為指示に焦点を当てている。分析の着目点は、日本人の母親と日本在住の祖母が行為指示を通していかに特定の価値観（社会的役割の認識・責務・努力など）に娘を社会化するのか、そして娘がどのような言語資源を使って抵抗や意思を示すのか（エイジェンシー）を、特に指示の格上げと格下げ・コードスイッチング・アカウント・提案の現象の分析を通じて明らかにしている。そして、移住のコンテクストでは、子どもが当該社会の言語や慣習を親に教えることがしばしば観察される。ここでは、双方向の社会化についても考察している。

第7章では、ピア間の社会化に焦点を当てている。若者のロールプレイをメタ語用論的な実践として捉え、彼らがどのように意識を働かせて活動を展開するのかを分析している。ここでは、日本語および日本社会のイデオロギーの習得に関する言語社会化の過程を探求している。移住を背景とバイリンガル話者にとって、ロールプレイは、メタ言語意識とメタ語用論的意識を喚起し、語用論的意識の習得とピアの社会化が行われる特別な場として分析し

ている。メタ語用論コメント、引用、略語の説明、造語、成員カテゴリー、アイデンティティなど、数多くの現象を観察・分析している。

第8章では、親子の相互行為において言語社会化のコミュニカティブプラクティスの1つである修復に焦点を当てている。また、データでみられた4つの修復形式（自己開始自己修復、自己開始他者修復、他者開始自己修復、他者開始他者修復）を取り上げ、修復、言語習得、世界観、アイデンティティ、言語イデオロギーの関係を探求している。この章では、家庭の言語方針における修復活動と成員性との関連に注目している。

第9章では、第1章から第8章までをまとめ、今後の課題および言語社会化研究の課題を提示している。

理論的枠組みにおける記述の厳密性、および、論文全体の構成の体系性についてやや不十分なところがあるという指摘があったものの、先行研究が少ない日本人・日系人のコミュニティーをフィールドに調査しているところに新規性があり、論文内容は高く評価された。

以上のように、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。